

P.ブルデューにおける「社会空間」と「界」の構築

——データ分析を通じた反省的社会学の可能性——

大 前 敦 巳*

(平成6年10月31日受理)

要 旨

小論は、フランスの社会学者である P.ブルデューが提唱する「社会空間」と「界」の構築という観点から、彼の経験的研究をわが国のケースに活用する可能性を模索する。この経験的研究の目指すところは、観察された可変要素の一つひとつのうちに、不変の要素、つまり「構造」を把握することである。そのために取らなければならない諸規準は、以下のように整理することができる。

1. 実体論的思考様式に代わって、関係的思考様式を採用すること。
2. 自生社会学との切断を行なった上で、対象の構成を試みること。
3. 個別の要素に事実を還元するのではなく、事実の体系的構成を行なうこと。
4. 位置空間と態度決定空間の同型性と、その相対的な自律について検討すること。
5. 客観化によって生じた現実との距離を、さらに客観的に把握してみること。

もちろん、上記の諸規準は、実際にデータの収集・分析を行なうことを前提にしており、そのかぎりにおいて小論の議論は意味を有することができる。

KEY WORDS

mode de pensée relationnel 関係的思考様式
construction systématique des faits 事実の体系的構成
analyse proprement interminable 終わりのない分析
espace social 社会空間
champ 界
champ intellectuel 知識人界
objectivation de l'objectivation 客観化の客観化
sociologie réflexive 反省的社会学

1. P.ブルデューの経験的研究を学ぶ視点

フランスの社会学者、P.ブルデューが展開している一連の研究は、教育の分野をはじめ哲学・民族学・歴史学・経済学など、種々の学問領域にわたることで知られている。特定領域に意図

* 教育基礎講座

的に取ろうとしないブルデューの「戦略」は、彼の研究を固定してとらえることを著しく困難にしている。それゆえ、小論でこれから取り上げるように、彼自身について論じようとする試みも、それ相応の危険が伴っていることをあらかじめ承知しておかなくてはならない。そうした彼の研究活動の凝固を許さない仕組みを考えてみると、少なくとも次の3点を挙げることができる。

第一は、彼の著作のいたる所でちりばめられている、「資本」「ハビトゥス」「界」「プラティック」といった諸概念の構成である。これらの諸概念によって、社会的に調節された行動の論理を説明することが目指される(Bourdieu[1987=1988:105])。ただしこれらの諸概念は、互いに連携しあったセットとして用いることによって、はじめて分析と説明の効力を持つことができる(Bourdieu[1979=1989:159] Bourdieu, Wacquant[1992:71])。ある特定の問題領域に囲いこもうとすればするほど、ある特定の概念に注意が向けられがちになるのであるが、個別の概念だけを孤立させて論じてしまつては、陳腐な議論に陥る以外になくなってしまいかねない。少なくともブルデューは、こうした限定的な読み方をされることを避けるよう意識して、自ら操作する諸概念を巧みに体系化していると言うことができる。

第二は、理論的概念構成に加えて、ブルデューの研究には、常に実証的分析が組み込まれていることである。教育、言語、食事、住居、結婚、芸術、学術、スポーツなどにわたる彼の研究対象の説明は、具体的な経験的データの収集と分析によって支えられている。つまり、空間的にも時間的にもはっきりと位置づけられた対象について議論がなされるがゆえに、彼の理論体系を大理論として援用することが禁じられる(Bourdieu[1990:59])。彼の社会学的説明は、特定の具体的な研究対象との関係の中に位置づけられることによって、彼の理論に見られる体系志向性にもかかわらず、それを過度に普遍化した解釈を免れるようになっている。

にもかかわらず、第三の点として、ある限定された対象を研究する場合でも、「対象を個別化・特殊化するような読み方」をしてはならないという警告が発せられる(Bourdieu[1990:59])。それは、ブルデューの次のような確信に基づいている。「社会世界の最も深い論理を把握しようと思ったら、歴史的に位置づけられ日付を与えられたある経験的現実の個別性・特殊性のなかに、どうしても深く潜り込まなくてはならない、ただしそれはこの現実を、バシュラールの言葉を借りれば『可能態の特殊ケース』として、すなわちいくつかの可能な形態の配置から成る有限な圏域のなかの、ある一形態のケースとして構築するためである。」(Bourdieu[1990:61])この確信に基づけば、観察された可変要素の一つひとつのうちに、不変の要素、つまり「構造」を把握しようと試みることが要求される。

以上のように、理論と実証、部分と全体、特殊と普遍といった区別を打ち壊そうとするブルデューの研究遂行上のねらいは、外国人としてのわれわれ日本人が、彼の研究に関わりを持つようとしたり、そこから示唆を受けて日本社会のケースについて考えようとする場合にも関与してくる。つまり、ブルデューがフランスやアリジェリアで研究したケースを、普遍化されたモデルとして日本のケースに当てはめることもできなければ、われわれとは無縁の異国で行われた研究と見なすわけにもゆかない。われわれに可能であると同時に彼から期待されていることは、彼の「戦略」に基づいてなされた経験的研究を、日本でも同様にたどってみることであろう(Bourdieu[1990:81-82])。小論では、そうした経験的研究を行なうことができるとすれば、それはどのような手続きを取るようになるのか、また、そこからどのような課題を引き出すことができるのかについて検討してみる。いわば小論の目指すところは、ブルデューが日本社会

を分析するとすれば、どのような計画表を作成するだろうかを考えてみることにある。

もちろんわが国でも、これまでもブルデューの研究紹介はすいぶん行われてきたし、すでに経験的データを用いた研究事例も見ることができる。しかし、従来の議論では、理論的な考察と経験的なデータ分析とが互いに分離する傾向が強く、両者の間にどのような接点を見出すことができるのかについては、これまで十分な検討がなされてこなかったといえる。

たとえば、ブルデュー理論を援用して階層や階級の「文化的再生産」を論じる立場からは、「文化資本」と「ハビトゥス」の概念が実証的研究との媒介を担ってきた。とりわけ「文化資本」の概念は、正統化され、それゆえ巧みに隠蔽された階級ないし階層の再生産過程を測定する指標として、分析の中で繰り返し用いられてきた。たとえば、「階層的地位の世代間継承にかかわって唯一容認されているのは、文化的・教育的過程を介してのそれで、ブルデューの概念を用いていえば、文化資本の制度態としての資格を介しての継承である」（宮島・藤田 [1991: 154]）と述べられている。

こうした「文化的再生産論」の試みに対しては、高橋（1990）が論争的な批判を投げかけている。彼は、「文化的再生産論とは、英米教育社会学の実践的問題関心（教育不平等問題）および方法論（計量的経験主義）の下で形成された、教育論—階級論の思潮である」（高橋 [1990: 4]）と指摘する。そして、「文化的再生産論」に欠けているのは、「高等教育制度」によって生産される「教育知」の問題であると述べている。筆者はこの指摘自体に異論を持たないが、しかしながら彼は、「高等教育制度」の存在特性をア・プリオリに仮定してしまうがゆえに、それが研究対象として経験的に構築されるものだということを見逃している。

別の文脈で石井（1993）は、現代日本社会において、衣食住のライフスタイルをめぐる差異化の問題を取り上げた興味深い分析を行なっている。そこでは、西欧に比べて社会の均質性が高い日本では、「階級」に代わって社会のあらゆるレベルに分散する多様な「差異」が見られることを、豊富な例を挙げながら示している。しかし、日常生活レベルでの差異化のプロセスに焦点が当てられたこの分析もまた、文化を介して階級や階層と結びついた個人や集団に、説明の主眼がとられることから免れていない。

これまでブルデュー理論に依拠して行なわれた経験的研究の多くは、階層や文化といった研究対象を「資本」と「ハビトゥス」の観点から説明しようとするあまり、それ以外の主要な概念である、「社会空間（espace social）」と「界（champ）」を所与とする前提で分析を行なう傾向が強かった。それに対して、小論で主張したいことは、「資本」「ハビトゥス」概念を内包した「社会空間」と「界」こそが、経験的研究の中で構築しなければならない研究対象になるということである。したがって、小論では「社会空間」と「界」の構築という観点から、ブルデューの理論構成と経験的研究との接点に相当する部分について検討を試みたいと思う。この作業は、われわれ日本人が、日本社会の文脈を意識しながら、ブルデューの経験的研究を学んでいく上でも重要な地歩を占めると筆者は考える。

2. 関係的思考様式

ブルデューは、1968年に書かれた「構造主義と社会学的知識の理論」で、主観を排除する構造主義に、行為者の側面を取り戻す「ハビトゥス」の概念を取り入れる必要があることを示し

た。その頃から彼は、構造主義と決別しようと志向する理論転換を図っていったと言われる (Bourdieu [1987=1988: 34] [1990: 30-31])。しかし、構造主義をめぐる彼の理論面での展開にもかかわらず、構造主義の方法を社会学に取り入れるという考え自体は、初期の著作から近著にいたるまで首尾一貫して変わらないことにも注意したい。とりわけ、ブルデューが経験的手段を用いて対象構築を行なう場合には、この変化しない部分が強調される。それは、彼自身によって「関係的思考様式 (mode de pensée relationnel)」と呼ばれているものであるが、ブルデューの経験的研究との関連を論じるためには、最初にこの思考様式について整理しておく必要がある。

ブルデュー自身の言明によれば、彼の研究に構造主義の方法を取り入れたのには、2つの源泉がある。一つは、よく知られているように、レヴィ=ストロースが人類学の分野で用いた方法である。もちろん彼の構造主義的前提のいくつかは、後にブルデュー自身によって批判されることになるので、彼自身による回顧の中では、レヴィ=ストロースの業績はあまり高く評価されていない。むしろ1960年代の「当世風の構造主義」に対しては、徹底した拒絶の態度が表明される。「構造主義をしばらく取り巻いていた哲学的注釈は、おそらく構造主義の本質的な新しさをなすと思われることを忘れてしまったし、人々に忘れさせもした。その新しさとは、社会科学のなかに構造論的方法、あるいはもっと端的に言って関係的思考様式を導入することであった。」(Bourdieu [1980a=1988: 6]) にもかかわらず、レヴィ=ストロースからブルデューが受けた言外の影響は、彼の一連の民族学研究の実践からして、計り知れず大きかったのではないかと筆者は推測する。

もう一つの文脈は、ブルデューが「関係的思考様式」という用語を、カッシーラーが科学哲学の中で用いた意味で使用していることである (Bourdieu [1987=1988: 68, 198])。この「関係的思考様式」は「実体的思考様式」と対立する概念であり、この点においてカッシーラーは次のように紹介されている。「現代数学や現代物理学が適用した思考様式や概念の生成過程を記述した際に、最も先進的な科学も、実体ではなく、関係 (例えば古典物理学における力のような) に特権的な地位を与えることによって初めて、しかも非常に近年になって、形成されたということを証明して、実証主義的見方の誤りを明らかにしました」(Bourdieu [1987=1988: 68])。さらに付け加えると、この思考様式についてカッシーラーが強調しているのは、関係的思考が、具体的感覚の素材にではなく、シンボルの思考に依存しているという点である。「シンボルの複雑なシステムがなくては、関係的思考は全く発生し得ないし、むしろ十分の発展段階に到達することはできない。…人間においては、関係を分離する—関係を抽象的意味に考察する—能力が発展した。この『意味』を把握するために、人間は、もはや、具体的な感覚の素材、すなわち視覚的、聴覚的、触覚的、運動感覚的、素材に依存していない。人間はこれらの諸関係を『それら自身において』考察する。」(Cassirer [1944=1953→1982: 51-52])

以上の2つの文脈から、ブルデューは、人類学と科学哲学を底流にする関係的思考様式の考え方を、社会科学の領域まで拡張させて活用しようとしたと解釈することができる。その場合、実際にどのような方法手続きを踏むことになるのだろうか。次節でその説明を試みることにしたい。

3. 関係的思考様式による分析手順

まず第一の手順として、何よりも先行して、ブルデューが「自生社会学 (sociologie spontanée)」と呼ぶものを切断することの必要性が挙げられる。「自生社会学」とは、「切断、対象の構成、事実の確立による三つの認識論的行為を経ないで、常識や先入観と連続しながら成立している社会学」(田原音和・水島和則)のことを指し、それは次のような「予先観念 (prénotion)」に支配されている。つまり、「社会的事実についての原初的意見 (opinions premières) は、同じ事実に対して矛盾してさえいるさまざまな説明を与えることによって、是が非でも共有意識と折り合おうとする働きを持っているので、交互に使えるようないろいろな判断を集めて、さも体系化を施しているかのように装っている」(Bourdieu, Chamboredon, Passeron [1973=1994: 45]), そうした観念のことである。

この自生社会学の切断を試みた古典的事例として、デュルケームの『自殺論』を挙げることができる。デュルケームは、自殺を引き起こす要因として、精神異常、アルコール中毒、人種、遺伝、気候、気温、模倣といった、互いに切り離された個人の上におよぼす諸要因を却下した上で、社会の上に影響をおよぼすことのできるような諸原因を追究した。これと同様に、ブルデューの関係的思考様式もまた、ある文化現象が組み込まれている歴史的・社会的関係のシステムとは無関係な要因を、その文化現象の決定因とすることを拒否する。「デュルケームの言っていた『社会的現実』とは、目に見えない諸関係の総体です」(Bourdieu [1987=1988: 199])と言われる時、それ自体単独で説明可能な個人内在的・自然発生的な要因への還元は、社会の説明から排除すべきであるということを暗示している。

しかしながら、自生社会学は、常識的な感覚と密接に結びついているために、いくら警戒しても完全に断たれることはない。たとえば、ブルデューは次のように言う。「人間性 (nature humaine) の概念は、単純性質のなかでも最も単純であり最も自然であって、いくたびとなく非難されてきたものの、それでもまるで貨幣のように、さまざまな種類の概念のもとに生き長らえてきた。たとえば、特定の経済学者たちが使う『傾向 (tendences)』あるいは『性向 (propensions)』とか、社会心理学者による『動機づけ (motivations)』、あるいは機能主義的分析での『欲求 (besoins)』とか『先行要件 (pré-requisits)』とかが、それである。自然の概念と深い関連をもつ本質主義哲学は、いまもなお性、年齢、人種、知的素質のような分析上の基準の素朴な使用のなかに生きている。」(Bourdieu, Chamboredon, Passeron [1973=1994: 54])したがって、関係的思考様式の立場においては、自生社会学に対するたえざる警戒を行なった上で、対象の構成を試みるのが不可欠の作業となる。

次に、関係的思考様式の第二の手順として、「事実の体系的構成 (construction systématique des faits)」を行なうことが挙げられる。それは、互いに切り離された個々の事実ではなく、それら全体を結びつけている諸関係に注目することを意味する。

たとえば、最も初期に行なわれたアンケート調査の結果報告集である『学生と彼らの学習』(1964)の中で、ブルデュー、パスロンらが実際にどのような分析をしたのかを見てみよう。この調査は、哲学と社会学専攻のフランスの大学生を対象に、大学進学に関わる文化的不平等の問題を主題としたもので、この結果は後に『遺産相続者たち』にまとめられている。第一部では、年齢、性別、出身地域、社会的出自ごとに、社会的条件、学習条件、学習熱意と態度、

政治的意見と態度、学部選択理由、職業希望、自己イメージ、文化的特性などとクロス表（ないしそのグラフ）を作成し、文化的に恵まれた社会カテゴリーが、学校の「エートス」や、文化に対する態度と規則的に結びついていることを示している。第二部では、演劇、絵画、クラシック音楽、ジャズ、映画に関する好みと知識が、学校がきわめて不平等に取り扱う領域において組織されていることが、第一部と同様クロス表（ないしそのグラフ）を用いて示される。これらの分析結果から、学校を前にした不平等は、文化を前にしたあらゆる不平等の原理を内包しており、それは決して「自然な」「天性の」不平等として説明されないと結論づけられる。

以上に述べた分析の手続きが、通常行なわれる実証的方法とどこが違うのだろうか。ブルデューらは次のような実証主義批判を展開する。「実証主義者にとっては、問いは単純な質問の形式をとり、一つひとつの質問に対して、事実が順々にイエスかノーかを答えればいいのである。実際には、このささやかな事実に証明力が備わっているのは、その事実が他の諸事実と関係しあっているからであって、それら他の事実にしても、仮説体系にもとづいて事実間に成立する関係から切り離して考察されるとそれ自体無意味になってしまうのである。これらの事実がじゅうぶんな意味をもつのは、ある事実の系列に組み込まれた項 (*termes organisés d'une série*) としてでしかない。…自分自身の前提をデータに押しつけないように思案するさい、社会学者が行なうのも同じ循環的運動である。社会学者は調査結果を分析する場合に、質問票のなかの回答全体を検討することによって、それぞれの質問—それらの質問によって回答を引き出し、回答をつくりだしたわけだが—の意味を解説する。〔そして今度は〕それぞれの質問の意味からわかったことを基礎にして、回答全体の意味をも再構成してみるのである。」(Bourdieu, Chamboredon, Passeron [1973=1994: 131-132])

しかし、このブルデューらの実証主義批判は、統計的手法を用いてデータを分析するという行為自体に向けられているのではない。実際、彼らが先の報告書で用いた分析方法は、ほとんどが二重クロス表の分析であり、この方法そのものはもっと洗練されてしかるべきなのである。それよりも彼らが問題にしているのは、実証主義の分析が前提にしている視点である。それは、「指標の名目上の同一性 (*identité nominale des indicateurs*)」に依拠した要素還元主義に対する批判と要約することができる。つまり、「さまざまな変数や要因を示す指標や用語が名目上同一であると、これらの変数や要因それ自体が同一不変であるという幻想が生まれてくる」(Bourdieu [1979=1989: 29]) 事態を看過させてはならないということである。また、そうした不明瞭な幻想を含んだ指標や要因の中に、結果全体を還元させるような分析を行なうこともできない。このような陥穽を避けるための基礎作業は、実証主義でもかなりの程度は行っているに違いないのであるが、ブルデューの場合には、それを「関係」という視点から方法的に徹底させなければならないとする。

そうすると問題は、ブルデュー自身のデータ分析の視点ということになる。彼の主張する「事実の体系的構成」が、実際の分析の中でどこまで実現可能なのかを考えてみなければならない。「実体」に対する「関係」の第一義性を主張するとしても、ある「関係」を構築するためには、そこに関与している諸特性 (*propriétés pertinentes*) を選定する作業が必須となる。しかし、どのようにすればこれらの関与特性をうまく突き止められるのかについては、ブルデューは多くのことを述べていない。おそらくは、対象に関する膨大な知識の習得(あるいは「実践感覚?」)を要求することであろう。だが少なくともはっきりしているのは、あらゆる社会的事象がすべて関係し合っているとすれば、この作業は必然的に「終わりのない分析 (*analyse proprement*

intermenable)』になることである。たとえば、学歴と美術館通いの関係に見られるような一見意外な組合わせに着目したり、『ディスタンクシオン』の末尾でなされた無回答の分析を行なうなど、様々な工夫をしてみる必要がある。

ただ、「事実の体系的構成」に伴うブルデューの全体論的発想の是非については、ここで立ち入ることはできない。一つだけ指摘しておきたいのは、同じフランスの社会学者であるブードンが、『社会学の方法』(1969)の中で、全体論的理想に基づく網羅的な記述を試みる以外に、それらの体系の諸要素にできるだけ満足のいく説明をあたえてくれる単純なモデルを構築する方法を十分に認めていることである。というのも、社会的現実の全体性にもとづいて変動を説明することをじっさいに期待できるのは、あまり複雑ではない社会が問題となっている場合に限られるからである。複雑な産業社会を問題にするときには、どうしても変動のある一定の要因に特別に重きをおいたモデルを構築しなければならない。ブルデューならば、この問題を以下に取り上げる「界」の概念を用いて解決を試みると考えられるが、「複雑なものは複雑な仕方ではしか言うことができない」(Bourdieu [1987=1988: 86])と標榜する彼の全体論をめぐる論争については、機会を改めて検討することにしたい。

4. 「社会空間」の構築

関係的思考様式は、前節までに説明したようにブルデューの基本的な対象構築原理となるのであるが、それに基づいて分析を進めることによって、最初の到達地点になるのが「社会空間 (espace social)」と呼ばれるものである。「社会空間」とは、「たがいに相手の外部にあり、たがいに他の位置との関係において、すなわち近接関係や隣接関係、あるいは隔たりの関係や序列関係によって、何々の『上に』とか『下に』とか『間に』といった関係によって定義されるような、そうした複数の位置の集合」(Bourdieu [1990: 70])と定義されている。この空間は、行為者や集団の統計的分布構造におけるそれぞれの位置に応じた差異化の原理、あるいは、当該の社会的世界の中で作用している諸特性全体によって構成される分布の原理に基づいて構築される。たとえば、ブルデューは『ディスタンクシオン』の著作以降、対応分析 (analyse des correspondences) の手法を用いて、関与特性間の諸関係を座標空間にグラフィカルに図示することを多く行なっている。

社会空間は同時に、ブルデューが研究対象の説明を行なうための一原点として位置づけられる。それは彼自身の言葉において「社会の位相幾何学 (topologie sociale)」と命名されている (Bourdieu [1984b: 3] [1987=1988: 199])。つまり社会的世界というものは、いくつかの次元を持った空間の形態の下で表現される。行為者やその集団は、この空間における自らの相対的位置によって定義され、その各々は「社会的位置 (position sociale)」の上に配置しなおされる。しかし、それは単なる各目上の位置関係を表すにとどまらず、ブルデュー独自の理論的特性が付与されている。「ある社会空間について語ることは、とりわけ経済的・文化的な基本的差異を無視しては、誰かと誰かをまとめることなどできないと言うこと」(Bourdieu [1984b: 4])と述べられる。

社会空間の第一の特性は、それが「資本」の空間として表現されることである。ここで言う「資本」とは、経済的元手のみならず、文化的素養や人間関係のネットワークなども含んだ、

広い意味での所有物のことである (Bourdieu [1990 : 182])。社会空間の第1次元は「資本の総量」によって、第2次元は「経済資本」と「文化資本」の「交差配列構造」を持った「資本の構造(相対的比重)」によって、それぞれ表示される。さらに第3次元として、個人や集団の「社会的軌道」によって示される「資本の時間的変化」の軸が加えられる。こうして社会空間は、「資本」によって構成される三次元空間として提示される (Bourdieu [1979=1989 : 178-180])。「資本」概念によって特徴づけられた社会空間は、行為者や集団の所有物や、それを所有するまでに要した時間に応じて、両立可能性と両立不可能性を作り出す空間として見なされる。たとえば、それなりの経済力がなければ高級クラブで見掛けることはありえないし、ある程度の知識と教養を前提にしなければ抽象絵画の展覧会は成功しないだろう。また、とりわけ文化的素養は、一朝一夕に会得するというわけにゆかない。このようにして行為者たちは、この空間内で互いに近く位置すればするほど彼らの共通性が高くなり、遠くに離れていればいるほどそれだけ共通性が少ないような形で配置される。「空間的一紙の上での一距離が、社会的距離に合致する」 (Bourdieu [1987=1988 : 200]) と考えられるわけである。

社会空間の第二の特性は、それが「ハビトゥス」の空間としても表現されることである。「ハビトゥス」とは、「ある位置にそなわった内在的な特徴や関係的な特徴を、統一的な生活様式＝ライフスタイルとして、つまり人間や財やプラティック (実践) に関する一連の選択の統一的な全体として具体化する生成・統一原理」 (Bourdieu [1990 : 72]) のことである。たしかに、休日パチンコを打ちに行く人と、クルージングに出かける人と、美術館に通う人の間では、それらの行動が、各人の社会的位置に応じた差異に対応していると言えるのかもしれない。ただ、ここでもう一つ強調されているのは、実際に産出される行為の側面だけでなく、そうした行為や物に対する知覚と評価の図式のほうである。たとえば、好きなものと嫌いなもの、向いているものと向いていないもの、良いものと悪いもの、上品なものと下品なものといった区別によって、意図的であれ無意図的であれ、様々な行為や物に対する評価がなされる。社会空間は、そうした親近性や疎遠性を生み出す空間として位置づけられる。つまり、社会空間は、社会的位置に応じた「自分の位置の感覚」を提供し、客観的境界を境界感覚に内面化させ、分布構造が自分に割り当てているものを自らに割り当てたり、自分に拒否されているものを拒否したりするよう仕向ける空間と見なされる (Bourdieu [1979=1990 : 345] [1987=1988 : 202])。

社会空間は、「資本」と「ハビトゥス」の概念と重ね合わせられることによって、位置(positions)空間と態度決定(prises de position)空間との間に、関係の同型性(homologie)が認められることを理論的に想定する (Bourdieu [1990 : 71])。そうして社会空間は、行為者や集団における類似と対立の諸関係によって結びつけられた位置の総体として理解される。しかし、類似や対立を生み出す基盤となる「資本」と「ハビトゥス」の概念自体を論じることは、もはや本稿の目的から離れるので、これ以上言及を行なうことは差し控えたい。それよりもここで注意しなければならないのは、この段階ではまだ、実際の研究対象については何も説明できないことである。社会空間は、関与特性間の関係の構造という観点から分析的に構成された空間にほかならず、対象を説明するための出発点となる見取り図を提供しているにすぎない。ブルデューは地理的空間における地図を、そのアナロジーとして引き合いに出すことがある (Bourdieu [1984b : 4] [1987=1988 : 200])。

したがって、この空間から経済的・文化的差異に基づいた分類原理を導入することができるとしても、それは理論的な次元でのみ解釈可能になるのであって、決して現実の階層なり階級

が存在すると考えることはできない。この空間から表現されるのは、「動物学や植物学にまさしく類似した説明的分類の産物である限りにおいて、分類された物事に関するプラティック（実践）や特性を説明し、予測することを可能にする理論的存在を持った、紙の上の階級」（Bourdieu [1984b : 4]）以外の何ものでもない。こうして理論的に構築された階級を、現実の階級と同一視して解釈を行なうことは固く禁じられる。「社会空間というこの見えざる現実、目に見えるように指示することも指で触れることもできない現実、しかしながら行為者たちのプラティック（実践）や表象を組織している現実、そうしたものとしての社会空間を構築すること、それは同時に、理論上の階級（集合）を構築する可能性を手にいれることにほかなりません。」（Bourdieu [1990 : 74]）実際の研究対象について社会学的説明を企てるためには、次節に見る「界」を構築する作業を経なければならない。

5. 「界」の構築

「界」の概念は、「社会空間」に比べれば、ずっと具体的なイメージと結びつけて考えやすい。たとえば、教育界、経済界、芸能界、スポーツ界など、われわれを取り巻く身近な生活領域を見回しただけでも、いくつか数え挙げることができるだろう。「界」は、「ある共通項をもった行為者の集合、およびそれに付随する諸要素（組織、価値体系、規則など）によって構成される社会的圏域」（石井洋二郎）と定義されている。

社会空間も界も、関係的思考様式に基づいている点で構築の仕方は同一である。いずれも関与特性の諸関係によって構成された空間である。また、位置空間と態度決定空間との同型性を想定している点も同じである。社会空間をマクロコスモスとすれば、界はその中の様々なミクロコスモスとして位置づけられる。実際、「社会空間の中で決定される行為者の位置は、様々な界の中で行為者が占めている位置によって定義される」（Bourdieu [1984b : 3]）と述べられている。

界が社会空間と事なる理論的性質を持つのは、この概念の形成にあたって、ブルデューがウェーバーの宗教社会学からアイデアを得ていることに多く由来する。「〈界〉の概念は、…1960年頃に、高等師範学校での私のゼミで始めていた、芸術社会学の研究と、『経済と社会』（ウェーバー）の中の宗教社会学を扱った章に対する解説との出会いの中から、引き出されたものです」（Bourdieu [1987=1988 : 40]）と言明されている。こうしたブルデューのウェーバー受容をめぐる経緯については、田中（1993）が詳しく論じている。

ここでは、界を経験的方法に基づいて構築するという観点から、界概念の理論的特性について整理することにしたい。

界の第一の特性は、それが内在の利害関係に基づいた固有の論理を持つ、相対的に自律した空間と見なされることである。それは外部の権力や権威に従属することから解き放されて、選別（sélection）と聖別（consécration）に関する固有の原理を備えている。それゆえ各々の界には、特定の賭金（enjeu）と利害関心（intérêt）が懸かっている。社会空間における行為者間や集団間の関係は、界の空間の中では、各々の社会的位置に応じて、そうした賭金や利害関係をめぐって競争しあう関係に置かれる。同時にこの競争は、それがなされるからこそ界の存立が支えられるという意味で、互いの共犯関係にあると解釈することができる。こうして界は、社

会空間において客観化された位置関係を、特定の利害関係空間における競争・共犯関係に変換する、一種の屈折効果を持ったプリズムの役割を担うことになる (Bourdieu [1990: 148])。

界の第二の特性は、正統と異端の定義をめぐって闘争が繰り広げられる、象徴闘争 (luttres symboliques) の空間と見なされることである。つまり、行為者や集団が界の中で獲得した利害や、それに対する見方や区分を、他の行為者や集団に正統なものと認めさせる闘争のことである。界の中で獲得した利害の正統性が承認されない限り、その利害は不正であると判断されかねない。一般的に、ある界に長く属する古参者が既存の正統性を保守し、そこへの新参者が正統性の転覆を企てる異端となる傾向がある (Bourdieu [1980b=1991: 145])。しかし、正統性の判断の根拠は本来恣意的であるので、正統性の承認は、その恣意性を誤認することによってしかなされない。ゆえに何らかの文化的恣意性を認めることを共有する点では、象徴闘争に参加する行為者や集団はまた、相互の共犯関係の中にある。このようにして界の第2の特性においては、社会空間において客観化された位置関係が、正統／異端空間における象徴闘争の関係に変換されることになる。

界は、以上のような行為者間や集団間の闘争を通して、歴史的に少しずつ形成されてきた産物であると考えられる。その牽引役を引き受けるのが、「権力界 (champ du pouvoir)」と呼ばれるもので、「権力を持った諸々の位置からなる空間」(Bourdieu [1987=1988: 199]) を意味する。つまり、社会空間の中で支配的位置を占める行為者や集団によって構成される界のことである。権力「界」と名のつく限り、この界もまた、決して一方的な権力関係を想定するのではなく、行為者や集団間の競争・闘争・共犯関係によって維持されている。権力界の中では、上記に述べた象徴闘争が繰り広げられる力の方向づけは、(学歴・経済・社会関係等の) 様々に異なる種類の「資本」間において確立される換算率 (taux de change) または変換率 (taux de conversion) に依拠している (Bourdieu [1989: 375])。この換算率ないし変換率次第で、どの種類の「資本」が、界の中で切り札 (atouts) として通用するかが決まってくる。このようにして権力界は、各々の界において最も有力なシンボル体系を取り決め、各時点の界の状態を作り出していく、磁力の発信部として位置づけることができる。

以上に述べた界の理論的特性から、界の構築が社会空間の構築と違って問題になるのは、相対的な自律を想定した界の効果や価値が、一体どの範囲にまで及ぶのかということである。すなわち、経験的に構築すべき界の境界は、どのようにして定められるのかという問題が現れてくる。それに対してブルデューは、「界の限界についての問題は、常に界それ自体の中で取り上げられるのであり、要するに、それはア・プリオリに回答することを許容しない」(Bourdieu, Wacquant [1992: 75]) という解決法をとる。したがって、界の境界は、次のようなトートロジー的性格を帯びた経験的調査によってしか、じかも暫定的にしか定めることができなくなる。それは、ある界を構成する関与特性が、界の構造を構成している効果と価値を決定することに貢献する諸関係によって結びつけられる限りにおいて、界の関与特性になりうるということである。関与特性は界を構成すると同時に、界によって特定されるのである。

「私は、一見トートロジーに陥る危険を冒して、界の効果が及ぼされる空間として界を認識することができるのだと言いましよう。その結果、この空間を横断する対象に到達することは、そこに内在する特性のみによってしか完全に説明できなくなります。界の限界は、界の効果が及ばなくなる地点にあるのです。したがって、各々のケースにおいては、様々に異なる手段によって、統計的に検出可能なこの効果が弱くなったり消えたりする地点を測定しようと試みな

ければなりません。経験的調査の作業の中では、界の構築は、最終的に決定を下す行為によっては行なわれません。」(Bourdieu, Wacquant [1992: 76-77]) このような経験的方法をとるとすれば、きわめて長く困難な試行錯誤を繰り返さざるを得ない。

6. データ分析を通した反省的社会学

界を構築するために必要な試行錯誤は、研究対象の社会学的説明を行なうためのみならず、それを企てる研究者に対しても問題を差し向ける。界の存在を前提して研究を行なう限り、それを行なう研究者自身もまた、界の効果から自由になることはできないからである。「科学は、まさに科学界の活動によって生産され前提される基盤の中の集合的信念以外に、他のどのような基盤も決して持つことがない」(Bourdieu [1975=1981: 275]) と言われる。その意味において界の概念は、たえず自己言及性を内に秘めている。界について行なった研究が、界による産物であるという循環した帰結になることについて、われわれはどう考えればよいのだろうか。

実際、界概念のこの性質は、ブルデュー自身の研究の営みを大きく方向づけている。その代表的な例が、彼が近年精力的に展開した「知識人界 (champ intellectuel)」に関する研究である。知識人界を題材に取り上げた著書として、『ホモ・アカデミクス』(1984)、『国家貴族—グランゼコールと団体精神—』(1989)などを挙げることができる。知識人界は、ブルデュー自身が立脚している界でもあり、特にフランスでは、この界は社会空間の中で「支配者の被支配層」に位置することが経験的に明らかにされている。この界との関係において、彼の研究が産出されるのであり、われわれも彼の研究が理解可能になる。言い換えれば、研究そのものが産出される界の構造を把握することは、研究対象として界を構築するための重要な条件の一つとなる。彼の研究は、フランス知識人界に固有の論理に従った、ある種独特の屈折を通過している。

この知識人界はまた、先に示したように相対的に自律していることを想定し、かつ、それは歴史的に形成されてきた産物であると考えられる。ブルデューは、この界が歴史的に自律化してきた過程について、次のような説明を行なっている。

知識人の生活は、中世の間を通じてネルッサンスの時代まで、フランスでは（宮廷の影響力を伴って）古典時代を通じて、外部からの正統化する権威によって支配されていた。その生活は、創造的芸術家が自ら貴族や教会の保護支援とその倫理的・美学的価値から、経済的にも社会的にも解放されるにつれて、知識人界の内部で徐々に組織されてきたにすぎない。そこでは、選抜と聖別に関する固有の権威が出現しはじめ、それは本来の意味で知性的なものであり、文化的正統性をめぐる競争の状態に置かれていた。L. L. Schuckling が示したように、貴族とその嗜好の基準への作家の従属は、演劇よりも文学の領域ではるかに長く続いた。というのも、「自分の作品を刊行しようと欲する者はすべて、偉大なる君主の保護支援を探し求めようとまく工面した」からである。パトロンや貴族の公衆の承認を勝ち取るために、作家は彼らの文化的理想と彼らの嗜好に順応せざるを得なかった。その嗜好とは、煩雑で不自然な形式への嗜好であり、自らの文化的習慣の中で普通の人々から自分を卓越化しようと欲する集団に特有の、秘儀主義と古典的ヒューマニズムへの嗜好である。それに対して、エリザベス期の段階における作家は、もはやもっぱら一人のパトロンの厚情や慈悲に依存す

ることはなくなった。ヴォルテールが、ハムレットの中の「動き回るネズミではない」描線の自然主義を賞揚するイギリス人批評家を想起したように、フランス宮廷の演劇が、観客となる上流階級の人々の言語と同様に高貴な言語に制約されたのとは違って、エリザベス期の劇作家は、自らの表現の自由を、様々な演劇監督の要求と、少しずつ出自が多様になった観客によって支払われる入場料に依存していた。そして、知性的・芸術的神聖化を行なう諸制度が、少しずつ増加し、多様化していった。その例はアカデミーとかサロンだけでなく、出版社、劇場、文化機関、科学機関のような、聖別化と文化普及の諸制度であった。それと同時に、観客層も拡大し、多様化していった。こうして知識人界は、外部の影響から少しずつ独立していく中で、文化的正統性をめぐる競争という、一つの固有の論理によって支配された諸関係を持つ界となったのである。(Bourdieu [1966=1971: 162-163])

しかしながら、ブルデューならともかくわれわれ日本人が、以上のような歴史的な文脈を持つ知識人界の中に明白な形で位置することはできない。この点において、われわれが界という観点から日本社会について考えようとする場合に、さらなる困難を引き受けなければならなくなる。われわれ自身の立脚する界が存立しうるかどうかとも知らずして、界の研究を行なうことなどできないからである。フランス社会とは異なった歴史的な文脈の中で、「相対的に自律した界」を構築することが、一体どこまで可能になるのだろうか。

これと同じような疑問は、アメリカの社会学者であるレマートによっても出されている。界の概念は、英語では普通“field”と訳されることが多い。しかし、レマートによれば、界の概念は、英語の持つ意味とは異なり、フランス社会独特のニュアンスがこめられているという。それはあたかも、フランスの中心たるパリが文化生産に携わる人々を引きつけ、そこで知的闘争が繰り広げられるかのように、磁石のように力を引きつける“force field”であると同時に、これらの力の間で闘争が行なわれる“battlefield”としての二重の意味を持っている。「フランス社会学を堪能に読みこなすためには、界を形成する諸規則、諸戦略、諸条件に関するかなりのことを知らなければならない。私は次の三つだけを議論することにしよう。それは、スタイルと個性の役割、社会学が生産される組織、出版に関する特殊な事情である。私がこの三つを選んだのは、それらがフランスの状況に最も特有のものだからである。」(Lemert[1981: 9])したがって、フランスで見られるのと同様の「相対的に自律した界」を、日本社会の文脈の中で構築することは実際上難しいかもしれない。

それにもかかわらず、筆者は、わが国においても界の構築を目指して、実際にデータの収集・分析を試みる学問上の意義は十分にあると考える。その出発点となる当面の課題は、知識人界をはじめ、日本で考えられる様々な界が、フランスのような形で相対的に自律しているのかどうかを、関係の思考様式に基づきながら、経験的素材を用いて確かめてみることであろう。日本とフランスとでは歴史的な文脈が当然異なるのだから、日本社会には「相対的に自律した界」など存在しないのかもしれないし、界が存在するとしても、それが歴史的に形成されてきた過程はフランスの場合と大幅に異なるかもしれない。場合によっては、日本社会に適合する形で、界概念の内容を修正する必要に迫られるかもしれない。そうした基礎作業を経ることなくして、日本で界概念に依拠した社会学的説明を企てることはとても不可能である。

歴史的な文脈の異なる社会においても、経験的分析によって界の構築を目指す一連の作業を共有することができるとすれば、界概念が持つ自己言及性の特徴を活かすことによってでしかな

い。それを実行するための手段が、「客観化の客観化 (objectivation de l'objectivation)」と呼ばれるものである。「客観化の客観化」とは、「客観的な・客観化する観察者という予め割り振られ承認された位置をしばらく放棄してそれを客観化してみる」(Bourdieu[1980=1988: 47])ことを意味する。この手段は、客観化によって生じる現実との距離を研究者の外部におくことを可能にする社会的諸条件と、当人が利用可能な客観化の技法との双方を客観化することを意図している。ブルデューは、『実践感覚』の序文の中で、系譜論、図式、一覧表、プラン、カードといった客観化の道具が何であるか、あるいはむしろそれらが何を作り出すかを吟味しない限りは、人々のプラティックの論理そのものを破壊する構築物によるほかに、プラティックの論理を把握するすべはないと述べている (Bourdieu [1980=1988: 18-19])。われわれが界概念を用いた分析をして有利なのは、日本であれフランスであれ、客観化の手段と現実との距離を客観化する手段が得られることにある。

「客観化の客観化」の作業を含めて、界の構築と説明を目的とする一連の研究は、「反省的社会学 (sociologie réflexive)」と総称されている。しかし、それはあくまで客観化の手段を用いてデータ分析を行なうことが前提となる。この前提は、客観性を離れて安易な直観に頼った反省はむしろ危険であるという、ブルデューの判断に基づいている。「反省性の視点を採用することは、客観性を放棄することではありません。そうではなく、それは純ノエシス的なものとして客観化の作業から恣意的に解放された、認識する個人の特権を疑問に付すことを意味します。つまりそれは、科学的主体によって構築される客観性の表現の中に、経験的『主体』を説明する作業のことです。とりわけこの作業は、社会空間—時間によって決定された場所に、科学的主体を位置づけることによって行なわれます。そしてこのことによって、科学的主体に行使される拘束に関する知識と、その拘束に対する(可能な)制御が与えられます。こうした拘束は、経験的主体とその利害、欲動、前提に取り結んだ、また、科学的主体が十分に構成されるためには手を切らねばならない、あらゆる束縛関係を通じて行使されるのです。」(Bourdieu, Wacquant [1992: 185])

日本でこれまで行なわれてきたように、「文化資本」と「ハビトゥス」概念だけに依拠した経験的分析では、「界」を構築することはほど強力な自己分析の道具を保有することができなかった。「文化資本」と「ハビトゥス」の概念は、「界」の概念と組み合わせることによってはじめて、分析手段としての有効性を発揮することができる。ブルデューの経験的研究を日本社会の文脈の中で活かすためには、関係的思考様式に基づいた「社会空間」と「界」の構築をめぐる、いろいろデータ分析を試みてみるのが、今後の何よりの検討課題であると筆者は考える。

小論は、ブルデューの社会学理論や経験的方法論について完結した考察を目指しているのではない。ここで試みた作業の目的は、われわれが現実の中でデータを収集・分析する上での留意点を確認することにある。データ分析を通した反省的社会学を実際に行なうことによるのみ、この論考もはじめて意味を持つことができる。

引用文献

(『ソシオロギス』誌 (5, 1981) で提案中の文献挙示方式による)

Boudon, R., 1969, *Les méthodes en sociologie*, P. U. F. (col. 《Que sais-je?》). =1970, 宮島喬

訳,『社会学の方法』白水社

- Bourdieu, P., 1966, "Champ intellectuel et projet créateur", in *Les temps modernes*, November, pp.865-906. =1971, "Intellectual Field and Creative Project", in Young, M. F. D. (ed.), *Knowledge and Control*, Collier-Macmillan.
- , 1968, "Structuralism and Theory of Sociological Knowledge", in *Social Research*, 35, 4, winter, pp.681-706.
- , 1975, "La spécificité du champ scientifique et les conditions sociales du progrès de la raison", in *Sociologie et sociétés*, 7, 1, May, pp.91-118. =1981, "The Specificity of the Scientific Field", in Lemert, C. C. (ed.), *French Sociology; Rupture and Renewal Since 1968*, Columbia University Press.
- , 1979, *La distinction; Critique sociale du jugement*, Minuit. =1989, 石井洋二郎訳,『ディスタンクシオン1』新評論. 1990,『ディスタンクシオン2』藤原書店
- , 1980a, *Le sens pratique*, Minuit. =1988, 今村仁司, 港道隆訳,『実践感覚1』. 1990, 今村仁司, 福井憲彦, 塚原史, 港道隆訳,『実践感覚2』みずず書房
- , 1980b, *Questions de sociologie*, Minuit. =1991, 田原音和監訳,『社会学の社会学』藤原書店
- , 1984a, *Homo academicus*, Minuit.
- , 1984b, "Espace social et g n se des 《classes》", in *Actes de la recherche en sciences sociales*, 53-3, pp.3-12.
- , 1987, *Choses dites*, Minuit. =1988, 石崎晴己訳,『構造と実践』新評論
- , 1989, *La noblesse d'Etat; grandes  coles et esprit de corps*, Minuit.
- , 1990, 加藤晴久編,『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学—』藤原書店
- , Passeron, J. C., 1964, "Les  tudiants et leurs  tudes", *Cahiers du Centre de Sociologie Europ enne* 1. Mouton
- , Chamboredon, J. C., Passeron, J. C., 1973, *Le m tier de sociologue; Pr alables  pist mologiques* (deuxi me  dition), Mouton. =1994, 田原音和, 水島和則訳,『社会学者のメチエ—認識論上の前提条件—』藤原書店
- , Wacquant, L. J., 1992, *R ponses; Pour une anthropologie r flexive*, Seuil.
- Cassirer, E., 1944, *An Essay on Man; An introduction to a philosophy of human culture*, Yale University Press. =1953→1982 (2nd), 宮城音弥訳,『人間—この象徴を操るもの』岩波書店
- 石井洋次郎, 1993,『差異と欲望—ブルデュー『ディスタンクシオン』を読む—』藤原書店
- Lemert, C. C., 1981, "Reading French Sociology", in *French Sociology; Rupture and Renewal Since 1968*, Columbia University Press.
- 宮島喬・藤田英典, 1991,『文化と社会—差異化・構造化・再生産』有信堂
- 高橋一郎, 1990,「文化的再生産論の再検討—『教育科学の社会学』の試み—」『ソシオロジ』第108号, pp.3-17.
- 田中紀行, 1993,「文化生産の社会学—P.ブルデューのウェーバー受容をめぐる—」『奈良女子大学文学部研究年報』第36号, pp.37-51.

La construction de l'《espace social》 et du 《champ》 par Pierre Bourdieu

—Pour une sociologie réflexive à travers l'analyse des données—

Atsumi OMAE*

RÉJUMÉ

Cet article a pour objet d'explorer la possibilité de réaliser dans le cas du Japon les recherches empiriques effectuées par Pierre Bourdieu. Particulièrement, j'ai examiné les méthodes pour construire l'《espace social》 et le 《champ》. Il est important de saisir, dans chaque élément variable observé, des éléments invariants, c'est-à-dire la 《structure》. Pour prendre cette perspective, il faut adopter les critères suivants.

1. adopter le mode de pensée relationnel en substituant au mode de pensée substantiel.
2. construire l'objet d'analyse après avoir coupé la sociologie spontanée.
3. construire systématiquement des faits sans les réduire en chaque élément.
4. examiner d'abord l'homologie entre l'espace de positions et l'espace de prises de position, et puis l'autonomie relative de cet espace.
5. objectiver la distance entre le produit de l'objectivation et la réalité.

Bien sûr, ces critères présupposent que la collection et l'analyse des données sont effectivement actualisées. Dans ce cas là, cet article pourra avoir son efficacité.

* Division of Foundations